

踊る身体の表現性

—演出・振付との関わりにおいて—

広島大学 播野尚子

モダニズムの到来と共に、各芸術ジャンルに固有の媒体の自律性が強調された。舞踊においても今世紀に入って、既に或る意味自明であった身体が存在が改めて意識され、その本然的表現性についても語られるようになった。身体の本然的表現性とは、人間が身体的存在として現前するというただそのことによって保証される、身体が持つ独特の表現性である。それは文化的なフィルターが介入しない全く始原的な意味の発生の場としての身体が持つものとされることもあれば、生物的・文化的な両側面から規定されるとされることもある。だがそのいずれにおいても問題になってくるのは、身体の日常的な営みにおける表現性と踊り手の表現行為におけるそれとの同異である。また、演出・振付との関係をどう調停するかというのも、問題となる。というのも、演出・振付は作品の内容・形式の両面に関わるものであるが、こちらに重点を置くと、踊り手は自らの外部に存在する表現意志の媒体としての位置付けを余儀なくされる。加えて演出・振付の成果を観客が十分に理解するためには、作品や演出家・振付家についての或る程度の知識が要求される。他方、身体が身体そのものであるというただそのことによって保証される本然的な身体表現性においては、表現主体は踊り手である。また、それは何の予備知識もなく初めて舞踊を見る人がその上演を楽しむことを可能にするものとされ、この意味で、その体験を演出・振付と全く別の次元で述べることも可能である。そればかりか上のように考えるならば、演出・振付は二次的な添え物であるばかりでなく、不要なものにさえなるだろう。上演の場にはただ踊り手の身体がありさえすればいいということになるからだ。

しかしながら踊り手の身体表現性は、演出家・振付家によって作品世界の中に位置付けられることで十全に露わになるものでもあろう。人間が身体的存在である限り、その本然的表現性は否定すべくもない。だがその同じ身体が観客を前にして舞う際に生じているのは、身体がその本然性においてあますことなく表現的であることがすなわち、上演の場に相応しいだけの切迫力をもって観客に対して表現的でもあるような事態である。

本研究の目的は従って以下のことについて述べることである。すなわち、踊る身体表現性が演出・振付によって十全に引き出されるものでもあ

ること、そして、演出・振付によって十全に引き出された表現性を持つ踊り手の身体が、観客の身体との間に強い身体的共振を生じさせ、両者を強く結び付けることである。尚、本研究では即興は扱わない。

踊り手の身体は、呼吸し、歩き、生活する日常的身体である以上に、舞踊表現たる動きを担い遂行する、踊る身体として存在する。このとき舞踊表現をそれたらしめるのは、動きそのものが持つ何らかの特性と言うよりもむしろ、上演が行われる社会的文脈であり、また踊り手と演出家・振付家、さらには観客によって共有される、上演芸術としての舞踊の伝統でもある。担うべき舞踊表現としての動きは、演出家・振付家によって与えられ、その結果踊り手の身体には過剰なものが課せられる。しかしまた踊り手は、演出家・振付家と共に本番まで行われる稽古に自らもまた主体的に参与する。踊り手の身体は、舞踊作品制作のプロセスそのものでもある稽古を通して、作品世界と分かち難く結び付き、作品内部において本然的であるべく、課せられた過剰を乗り越える。踊り手の踊る身体は、この乗り越えによって本然的な表現力を解放し、強い表現性を、すなわち観客に訴えるだけの切迫力を得る。

踊り手の踊る身体はその強い表現性によって観客の身体に強い共振を引き起こす。それは日常の場面で経験される共振を超えている。踊り手と観客の間で生じた強い共振は、その揺さぶりの強さの故に、両者が強く結び付き、新たな経験をすることを可能にする。確かに実際の、それも成功した上演においては、そこに我々が強く引かれ巻き込まれるが故に却って、踊り手の身体が示す表現性は演出・振付とは無縁のもののように思われがちである。だが、踊る身体の本然的表現性とは本来、舞踊芸術として了解される作品の上演の場において踊り手と観客とを強く結び付けることを可能にする、演出・振付を介した踊り手の身体が持つ表現性である。